

スコットランド第7代エルギン伯爵と大英帝国の時代

7th Lord Elgin and the Era of Prosperity of British Empire

北 政 巳

Masami KITA

1. エルギン伯爵とスコットランド

イギリスで現在でも残っている世襲貴族は約700家族、スコットランドでは約20家族と言われるが、最も有名なスコットランド貴族はエルギン伯爵家と縁戚関係となるグレイ家である。なぜなら自家ブランドのアール (Earl 伯爵の意)・グレイ茶で有名である。(1)

エルギン一族にもグレン (Glen 谷間の意)・エルギンと呼ばれるシングル・モルトの自家ブランドのウイスキーがあり、国民的英雄のウォレス家とも並ぶスコットランドを代表する名家である。

現在、ヨーロッパではヨーロッパ共同体が形成され複合民族連邦国家として機能しているが、イギリスは文字どおり原典的なイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドから構成される複合民族国家である。特に16世紀にイングランドに従属したウェールズと異なり、1707年に合併して連合王国を形成したスコットランドは特異な立場にある。事実イギリスの統計資料では、イングランド・ウェールズを同じ括りで扱い、スコットランドとは分けてある。(2)

面白いのはサッカーの世界・カップの予選に、大国のアメリカ、ロシアでも1代表なのに、イギリスはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4代表が参加する。その根拠にはイギリスはアメリカのように民族を問わず政治単位の家 (state) とする国家観ではなく、4民族国家 (nation) 連合から構成される国とされるからである。たとえばイギリス国歌は「神よ 女王を守りたまえ」(God Save The Queen) であるが、スコットランド・チームは国際試合の前に「国歌」を歌うが、それは「スコットランドの花」(Flowers of Scotland) であり、もうひとつのスコットランド人愛唱歌「勇敢なるスコットランド人」(Scotland the Brave) 同様に、内容はエルギン伯爵家の原点である反イングランドの英雄ロバート・ブルースのバノックバーン戦場での雄姿を讃える歌である。それがスコットランド人の民族心の表明である。(3)

民族的に見てもスコットランド人はアイルランド人同様にケルト (Celtic) 族が主体であり、イングランドのローマ人との混血を主とするブリトン (Briton) 族と異なる。地理的にみても、ローマ人がケルト人の侵攻を防ぐために作った2つの壁、「アントニウス帝の壁」と「ハドリヌス帝の壁」がブリティン島の北と南の異なる国の境界を形成した。(4)

体型的に見てもイングランド人は金髪、顔の額の広い長身、スコットランド人は黒髪、額も狭く短身の特徴をもつ。さらにキリスト教流布を見てもイングランドではローマから入りセント・ジョン・クロス十印を特徴とし、スコットランドではヨーロッパ経由で入り×印のセント・アン

ドリュース・クロスとする。イギリス宗教改革後、両地域とも英国国教会（聖公会 Established Church, Anglican Church）を制度化したが、イングランドは国王は教会首長であり大衆も監督教会派（Episcopalian）に近く「国王に至上権」を容認するのに対して、スコットランドでは「国王も一会員」とする長老会派（Presbyterian）であった。（5）

スコットランドの近代は、ヨーロッパ大陸の宗教改革の影響を受けた1560年のノックス（J. Knox）の宗教改革に始まり、彼の著作『訓育書』に書かれた伝統的な平等観の上に清教徒主義（プロテスタンティズム）倫理の実践による、職業を通じての敬神が特長となった。イングランドの教育が「出自や財産」を主軸に展開されたのに対し、スコットランドでは「能力主義教育」主義が展開された。（6）

それを象徴するのは「スコットランドとはどのような国」と聞くと、戻ってくる慣用の言葉が「羊飼いの息子でも大学教授になれる国」とされ、社会層の対流現象の起る国だとされる。（7）

その教育の差異の起源を辿ると、スコットランドのキリスト教は、南のイングランドがローマ経由であったのに対して、北ヨーロッパ経由であった。紀元563年に聖コランバ（St. Columba）がアイオナ（Iona）にケルト教会を設立、600年頃に聖マンゴがグラスゴウに最初の教会を設立、11世紀には聖ニニアンが修道院を設立し神学教育の基盤を形成した。11世紀末にケルト教会のマルコム王がイングランド人女性マーガレットと結婚した。彼の死後マーガレットがローマ教会を宣揚したことから、次第にスコットランドのキリスト教もローマ化されていった。

スコットランドでは自由民を対象に、中世ヨーロッパで最初の義務教育法が施行されたことはスコットランド社会では教育熱心が原点にある。それは就業のための必要手段であった。

また中世イングランドにオクスフォード大学とケンブリッジ大学の2大学しかない時代に、スコットランドには1413年創立のセント・アンドリュース大学、1451年創立のグラスゴウ大学、1495年創立のアバディーン大学が創立され、スコットランドは北西ヨーロッパの一大神学センターとなった。注目されるのはセント・アンドリュース大学はスイスのジュネーブ大学、グラスゴウ大学はイタリアのボローニア大学、アバディーン大学はフランスのパリ大学をモデルに設立された。つまりヨーロッパのルネッサンスの流れをくむ文芸の3つの都から影響を受けてのヨーロッパ的視野から設立された。4番目のエディンバラ大学は、1560年のJ. ノックスの遂行したスコットランド宗教改革後の1583年の設立であり、市民自治体の理想の実現を目指した。（8）

中世イングランドでは学問が神学の「下僕」扱いであったが、スコットランドは僻地ながらヨーロッパ・イタリアから伝来したルネッサンスの影響を受け、斬新的な学問（実用学）に向かい、節儉と勤労の倫理に支えられ実学思想が醸成され、それを身につけたスコットランド青年が就労機会を求めイングランドまたヨーロッパ各地に出稼ぎ・移民した。つまり実学教育の拡大と推進は、大きな「後押し」となった。

四大学の中で実用教育を最も実践したのはグラスゴウ大学であった。セント・アンドリュース大学に学んだW. タンプルがヨーロッパ各地を回り、イタリアのボローニア大学をモデルにグラスゴウ大学創立を構想したが、その創立年1451年は彼の逝去年であった。

スコットランドの高等教育は為政者メアリー女王、ジェームズ1世の後継者チャールズ1世、さらに多くの地主・教会関係者からの寄付を受け、グラウゴウ大学を中心とするスコットランド諸大学は一方ではギリシア・ヘブライの古典学重視の伝統の上に、ノックスの宗教改革案の実学を掲げて対応し、近代社会の求める実用学の展開を目指した。(9)

イングランドのオクスフォード・ケンブリッジ大学には上流・富裕層の子弟が多く集まったのに対し、スコットランドのグラスゴウ大学には中流階級の子弟や地方牧師の推薦する貧困層の庶民が集まった。特に北イングランドや北アイルランドの長老会派の師弟が多かった。その実用学教育のルーツを探ると、スコットランドでは、1496年に中世ヨーロッパ最初の義務教育施行が挙げられる。(10)

英国は政治史では、1603年にイングランド女王エリザベスが後嗣なく歿しスコットランドのジェームズ6世がイングランドに招かれてジェームズ1世として即位した。「王冠の結合」と呼ばれる。さらに封建反動を経て1649、1688年の清教徒革命を経て、1707年のイングランドとスコットランドの「合併」を迎える。経済的に劣位で困窮したスコットランドが受け入れたことから「経済的合併」と呼ばれる。

この激動の時代の中で、グラスゴウ大学の授業カリキュラムの文芸科目は清教徒主義の原理と実利実用学の原則で決められ、最初の2年はギリシア語・ラテン語・論理学・算数学初歩、3年に倫理学・幾何学・形而上学、4年に自然物理学となった。開かれたスコットランドの教育は廉価で実用的と評価が広まり、外国からも多くの人材を集め、有名な外国人に1603年にはアメリカの書籍販売業のD.キャンベル、1727年にはジャマイカの貿易商のW.キャンベルが入学した他、ロシアを中心に多くの北ヨーロッパ留学生を集めた。

1707年のイングランドとの合併によりスコットランドは独自議会を失い、また多くの貴族が官職・特権を失った。1715年と1745年の2度のジャコバイト（王党主義者、Jacobean）の反乱鎮圧で、スコットランドでは親イングランドのレアード(laird)と呼ばれる開明的地主の活躍する時代を迎える。彼らに共通するのは、18世紀スコットランドに共通する長老会派主義と実利学教育の伝統であった。(11)

また中世からのヨーロッパ各地への傭兵・出稼ぎや、2度の反乱鎮圧の結果に海外（アメリカ・オーストラリア・ニュージーランド等）へ政治犯として送られたスコットランド高地地方部族の末裔が作り上げたスコットランド人ネットワークが挙げられる。

このような歴史状況を背景に、エルギン伯爵家はスコットランドを代表するかたちで歴史に登場した。

2. エルギン伯爵の家系

イギリスでのスコットランド人貴族のエルギン伯爵家の系譜をたどると、著名なロバート・ブルースがスコットランド諸部族を統一し、1306年から1329年までスコットランド国王として活躍したことに出自がある。(12)

1314年のスターリング城横のバノックバーン戦場で、ロバート・ブルースが僅かな軍勢を率いて多勢のエドワード2世のイングランド軍を撃破したことは有名である。その時に彼が残した「アーブローズの宣言」の「自らと自らの臣民が共に国を治める」は、ローマ法王統治からの史上最初の独立声明とされる。そして世界史上最初の「民主化宣言」とされ、アメリカ独立宣言の淵源とされた。その後には彼の一族から、中世ではロバート1世、ディビッド2世の2人のスコットランド国王を輩出した。(13)

1603年6月に初代エルギン伯爵のトーマス・ブルース(1599-1663年)が、スコットランド国王から第3代キンロス(Kinloss)伯爵に任命された。その前は1603年にエドワード・ブルース(1548-1611年)が初代キンロス伯爵、同名のエドワード・ブルース(1594-1613年)が第2代キンロス卿・第2代キンロスのブルース卿となり、トーマス・ブルース(1599-1663年)が第3代キンロス卿・第3代キンロスのブルース卿を兼ねたが、さらに1663年にエルギン伯爵に叙位された。(14)

ブルース一族は既にスコットランド北東部のファイフ州のキンカーディン(Kincardine)の地主になっており両領地を保有する伯爵家となり、スコットランドではウォレス(Wallace)一族と並び評される名門となった。ブルース伯爵家は栄え、1641年にトーマスはウォートンのブルース男爵に叙せられた。

第2代エルギン伯爵となる息子ロバート(1627-1685年)は1662年にアイレスバリー伯爵、ベットフォードのアンプトヒルのブルース子爵(Viscount)、ヨークのスケルトンのブルース男爵(Baron) 貴族となった。

第3代のブルース伯爵のトーマス・ブルース(第2代アイスバリー伯爵を兼ねる、1656-1741年)は1685年に爵位を継承したが、イギリスの名誉革命に際しイングランド大衆がドイツから到来した清教徒オレンジ公ウィリアムズを歓迎したのに対し、彼は敵対しジェームズ2世を支持した4人の貴族の一人となった。さらに幽閉されたジェームズ2世のロンドン塔脱計画に関与したためトーマス・ブルースも捕えられ、同じく1696年に幽閉された。(15)

彼の死後、息子のチャールズ(1682-1747年)が後継して4代目エルギン伯爵(第3代アイレスバリー卿)となった。チャールズ・ブルースは親イングランド貴族として活躍し、第2次ジャコバイトの乱鎮圧後の1746年4月にはイングランドのウィルト(Wilt)のトッテナム(Tottenham)のブルース男爵に任じられ、スコットランド貴族で合併後の最初の英国(United Kingdom) 貴族となった。彼に男子後継者がなくウォートン男爵は断絶しキンロス卿は保持者不詳となったがエルギン伯爵は遠縁の第9代キンカーディン伯爵のチャールズ・ブルースが後継し、トッテナムのブルース男爵は4代伯の妹のトーマス・ブラネル=ブルースを招き後継とした。キンロス卿は貴族院に計って1868年に4代目伯爵の子である第3代シャンドス公爵ジェイムズ・ブリッジス(1731-1789年)を正当相続人に決め、現在は、その女系子孫が保持している。(16)

第5代エルギン伯爵は同名のチャールズ(第9代キンカーディン伯爵を兼ねる、1732-1771年)が後継したが、1771年に逝去した。次に息子ウィリアム(1764-1771年)が僅か7歳で第6代エルギ

ン伯爵・第10代キンカーディン伯爵を後継したが数ヶ月で病死し、その弟トーマス(1766-1841年)が5歳で第7代エルギン・第11代キンカーディン合同伯爵となった。大英博物館所蔵の「エルギン大理石」で有名なエルギン伯爵である。(17)

その息子の第8代エルギン伯爵・第12代キンカーディン伯爵のジェームズ・ブルース(1811-1863年)が、本著の中心人物で、19世紀中葉のイギリス資本主義帝国の繁栄の時代の中で、ジャマイカ、カナダ、中国、日本、インドで活躍することになる。

エルギン家は、さらにヴィクター・ブルース(1849-1917年)が第9代エルギン伯爵・第13代キンカーディン伯爵となり政治家として活躍、1894-1899年までの間、父と同じようにインド副国王を務め、1905年には自由党のヘンリー・キャンベル＝バナマン内閣に植民地大臣として入閣した。(18)

さらに息子エドワード(1881-1968年)が第10代エルギン伯爵・第14代キンカーディン伯爵、続いてアンドリュー(1924-)が第11代エルギン伯爵・第15代キンカーディン伯爵となり現在に至る。第10代エルギン伯爵は第2次世界大戦中に英国首相のチャーチルの秘書を務めたことは知られている。

チェックランド教授の『エルギン一族の歴史』の中で、教授自身がカナダ義勇軍でケンブリッジ大学留学中に第2次世界大戦でサハラ砂漠に戦車隊で従軍したが、奇遇にもアンドリュー・ブルース伯爵もイギリス軍からサハラ砂漠の出兵、共にドイツのロンメル將軍率いる戦車隊と対峙した共通の思い出を書いている。(19)

さらに彼の法定相続人には長男チャールズ・ブルース伯爵(1961-)が決められており、2009年の横浜開港150周年の記念行事の「エルギン伯爵美術工芸展」に神奈川歴史博物館行事に来日された。またブルース伯爵の継嗣はジェームズ・アンドリュー・チャールズ・ロバート・ブルース(1991-)が英国王室から既に裁下されている。(20)

3. 第7代エルギン伯爵

第7代エルギン伯爵となるトーマスの母マーサは、一族がイングランド・スコットランド両地域に広がる名家となれるよう、トーマスには親イングランド教育を準備した。先ず8歳から12歳までロンドンのウェストミンスター学校に送り、16歳から故郷スコットランドのセント・アンドリューズ大学で学ばせた。(21)

トーマスはギリシア・ラテン語、古典研究に才能を発揮し、セント・アンドリューズ大学で彼の書いた「ギリシア悲劇」論評で大学賞を受ける程の秀才と賞讃された。当時のスコットランドでは、貴族や自由民の師弟は10代半ばから大学に学び実学を習得し、余裕のある者はさらに遊学する『グランド・ツアー』の伝統があり、大陸やイングランドに渡った。アダム・スミスもバックル公に随行して大陸に渡り、パリでフランス百科全書派と言われる知識人と交遊機会を得て、自らの思想・哲学の糧としたことも有名である。(22)

この時代のスコットランドは「スコットランド・ルネッサンス」(Scottish Renaissance)と呼

ばれる「スコットランド啓蒙主義 (Enlightenment)」の全盛期にあり、スコットランド「常識学」がヨーロッパの知性を主導した時代でもあった。(23)

トーマスは、文芸復興の中心者であったセント・アンドリュース大学の学長のウィリアム・ロバートソン教授に刺激を受け市民法に関心を持ち、外交分野に進むことを決意する。1785年、18歳の時にフランスのパリ高等学院に学び、そのあと陸軍に入り、スイス、フランス、ドイツを回り陸軍大将の資格を得た。(24)

トーマスは24歳の時に、スコットランド近代化の指導者 H. ダングス公爵の目に留まる。1707年の合併後スコットランド貴族の多くは官職を失ったが、彼らのは一方では親イングランド秩序の体制内に入り「連合王国」の発展に尽力していくか、もしくは故郷を捨て海外の新天地に赴き、異国でスコットランド主義的な秩序を保持していくかの選択を迫られた。ちょうど英国（連合王国）が A. スミスの自由貿易主義の思想を掲げる首相ピットの政策を背景に世界市場に進出する時代であり、双方の流れとも「離散共同体」(Diaspora)としてスコットランド世界の拡大に役立っていた。(25)

H. ダングス公爵もスコットランド産業復興の中心委員会議長の他にイギリス東インド会社要職も兼ねており、スコットランド貴族2世の学識・教養のある若手有望な人材を「大英帝国」の中で登用しようと試みた。ダングス公爵は第7代エルギン伯爵のトーマスをオランダ・ハーグに派遣し中欧での情報収集に当たらせ、翌年にはブラッセル、さらにベネチア、ベルリンへ行かせた。彼も期待に答えて語学力と教養を生かして活躍した。1790年から1840年までの間、英国貴族院議員もつとめた。

1789年にイギリスのライバル国のフランスにナポレオンが登場し勢力を増してエジプトを侵略、さらにトルコへの進撃を開始した。憂慮した英国王ジョージ3世は同年11月に第7代エルギン伯爵をトルコのオスマン帝国への特命全権大使に任命した。翌年早々に、彼は地元地主の娘 M.H. ニズベットと結婚し1801年にイスタンブールに赴任した。(26)

当時、ギリシアはオスマン帝国の占領統治下にあった。またオスマン帝国はフランスの侵攻を受け苦境に陥ったがイギリス軍の助勢を得て1801年にフランス軍を撃退し、英国とは良好な関係にあった。(27)

古典愛好家の第7代エルギン伯爵はトルコ国王ルタン・セリム3世の許可を得て、莫大な私費を費やしてアテネのパルテノン神殿の彫刻を3度にわたりはぎ取り、英国へ持ち帰った。その話しを聞いた古典愛好者フランスのナポレオン皇帝は大激怒した。

1810年にトーマスが離婚し、また母親が亡くなると、彼がアテナイの神殿から持ち帰った大理石の入手・輸送・保管の費用の借財問題が深刻化する。苦境から思いついた大英博物館への売却交渉も進展せず、一層の苦境に追いこまれた。(28)

1807年2月にロシアが海上交易を求めて南下し、トルコに対して戦争を仕掛け露土戦争が勃発した。トーマスは1811年3月にイギリスに戻り、ロンドンでエリザベス・オズワルドと再婚した。同年の11月にジェームズ（のちの第8代エルギン伯爵）が生まれた。

戦争中、イギリスはトルコの同盟国として、トルコ・ギリシアに精通したレバント (Levant) 会社を用いて情報収集に努め、また戦闘状況を優位に導いて1812年1月にダンダネルズの和平条約を結んだ。

第7代エルギン伯爵の持ち帰った大理石はスコットランドのファイフの居城やロンドン地所に保管されたが、売却話も進まず経済的苦難の日々が続いた。そのため息子ジェームズたちは所領での貴族生活には戻れず外国のパリやロンドンで細々と生活した。しかし、それが息子ジェームズの外国文化理解に精通させ、フランス語も流暢に話す博学青年に成長させた。(29)

1808年大英博物館の主任J. プランダからアテネから持ち帰った大理石への受け入れ交渉始まり数年を経て1811年に話がまとまった。1816年に最終的に大理石は大英博物館に収蔵された。しかしエルギン一族が支払った費用の半分にも満たなかったため、エルギン一族の経済的苦境は続いた。それが8代エルギンが外交職に入る動機にもなったことも事実である。(30)

他方1810年にイギリスの詩人バイロン (Byron) がアテネの聖地パルテノン神殿を訪問、エルギン伯爵によって剥ぎ取られた古典彫刻の哀れな姿に激怒し「古典芸術破壊者」として非難した。バイロンは「エルギンの生贄」と呼び、エルギンに対して「ギリシア女神のミネルバ (智恵と芸術) の呪い」と題する詩を送った。その結果、この大理石は「エルギン・マーブル」と呼ばれ大英博物館の中でも最も有名な品物のひとつとなり、現在まで返還を主張するギリシア政府と拒否する英国政府との紛争の火種となっている。

4. スコットランド・ルネッサンスの時代

『ロビンソン・クルーソー漂流記』の著者D. ディフォーは1729年に『イギリス紳士年鑑』を発刊し、その中で「イギリスでは貴族3万の中で長男を大学に行かせている人は200家庭に過ぎず、この1世紀半で大学生の数も半減した」と書き残した。事実、イングランドでの学問衰退傾向は著しかった。(31)

『道徳感情論』(1759年)や『国富論』(1776年)の著者であり古典派経済学派の始祖とされるA. スミスは、グラスゴウ大学を卒業後にオクスフォード大学ベリオル・カレッジへ留学したが、其処での印象を「オクスフォード大学で正教授の大半も、長年にわたり教える体裁さえ失っている」と非難した。また同大学のモートン・カレッジに学んだスコットランド人歴史家E. ギボンも「教授たちは自らの良心から読書・思索・著述を行うことを忘れ、深酒に溺れており、さらに学生にも風潮を助長している」と憤激の文章を書き残した。(32)

イングランドでは名門の両大学の学問は沈滞したが、スコットランドでは4大学を中心に実生活に必要な学問が進展した。さらにスコットランド実学教育の影響を受けた北部イングランド地方を中心に、英国国教会に属さない非国教徒 (ノン・コンフォーミスト、ディセクターと呼ばれる) の専門学校で実用学的な自然科学・化学・商業学・会計学・速記学が発達し、来るべき産業革命の時代の人材育成に貢献した。(33)

18世紀後半のスコットランドは、レアード (laird) と呼ばれた開明的地主層を中心に社会経済

発展をとげ、スコットランド啓蒙主義に主導するルネッサンス（文芸復興）の時代を迎える。イングランドにとって17世紀の清教徒革命・名誉革命が社会発展の画期となったように、スコットランドにとっては1707年が時代画期となり、1715年の第1次、1745年の第2次ジャコバイトの乱鎮圧後に、広範な一大社会改良運動が展開された。親イングランドの運動であり、使用言語も従来のケルト語から英語への転換であった。

18世紀後半には、エディンバラは「北方のアテネ」と呼ばれ「文芸の都」として、ケイムズ卿を中心にスコットランド・ルネッサンスのメッカとなり理性覚醒運動が展開された。オクスフォード大学から失望して故郷カーカルディに戻ったスミスにケイムズ卿がエディンバラでの英語での文芸講座の講師職を与えたことは有名である。(34)

エディンバラでの公開講義成功で評判を得たスミスは、母校グラスゴウ大学の道徳哲学教授に迎えられた。その後エディンバラが文芸の都として有名となり、ライバルのグラスゴウは科学技術の大学として有名となる。グラスグ大学の数学・天文学器具修理工のJ.ワットが蒸気機関を発明したのを契機に、同大学が産業革命の原動力となる幾多の発見・発明に成功し、グラスゴウ・西部スコットランドは世界のハイテク・センターとなった。

グラスゴウ大学には、スミスの先生だった哲学のF.ハチスン教授、化学のW.カレン教授、潜熱発見者のJ.ブラック教授、自然物理学のJ.アンダーソン教授が活躍した。これらの諸教授が他のスコットランド3大学と連動して、一大社会改良・啓蒙運動を展開した。このスコットランドの文芸復興運動の輪の中に第7代エルギン伯爵も入っていた。(35)

スミスは、中世社会では「満月夜には出歩かない」との盲信を否定し、むしろ見通しがよく夜道も歩き易いと「満月会」を発起して啓蒙活動を展開した。各地で政治・経済クラブや文芸協会が設立され、それらがイギリスの重商主義政策を批判し次の自由貿易主義への社会思潮形成に貢献した。(36)

またアンダーソン教授は、合併後に急成長したスコットランドのタバコ貿易業が1776年のアメリカの独立を契機に凋落・衰退した時に、貿易業者を集め世界最初の「商工会議所」を作り、貿易政策指導また地域産業振興への転換を促した。アンダーソンの指導下に西部スコットランドのクライド河流域には、次の時代を迎える産業基盤を形成した。

またアンダーソン教授はグラスゴウに「市民大学」設立構想の遺言を残したが、それが市民の手で実現されアンダーソン・カレッジ（現在のストラスクライド大学）と呼ばれた。卒業者は自らをアンダーソニアンと呼び、世界で活躍し、アメリカのスミソニアン博物館の創立にも影響を与えた。総合的な科学技術振興のため、グラスゴウ大学が科学技術を先駆するエリート科学者を作り、アンダーソン・カレッジがエリートを補助する優秀な職工を養成する体制を創出した。(37)

イギリス産業革命の進展とともに、アンダーソン・カレッジは英国各地で発起された職工協会（メカニック・インスティテュート）のモデル校となった。イングランド3番目の大学ロンドン大学のバーベック・カレッジも、1826年にアンダーソン・カレッジのG.バーベック教授がロンドンに下り夜間技術校を開始したのが起源であった。さらにマンチェスター、リーズ、リバプールへ

と各地工業都市に職工協会が設置され工業技術の熟練工育成講座が普及し、教壇に立ったのはスコットランド技師であった。

グラスゴウ大学のケルヴィン卿の友人のエディンバラ大学教授の W. フェアバーン卿が「エンジニアとは狭義の機械に関与する人物ではなく、心の中で成功への手段を求めて精神と行為を実践し、いかなる困難な職務を遂行する人物」と定義したが、スコットランド人技師はヨーロッパで中世から尊敬されてきた3つの専門職（プロフェッショナル）の牧師、医者、法律家と比べて、この時代を迎えスコットランド技師は「牧師は人の心を耕し、医者は人の病を癒し、法律家は人の行動の基準を教える」尊敬されるべき専門職であり「生活向上に貢献するエンジニアは第4のプロフェッショナル」を主張した。

ヨーロッパ大陸でも工業化の進展とともに同傾向が見られた。特に19世紀のナポレオン戦争以降の戦争に近代科学火器が用いられた。一方では武器に進展、他方では武器で怪我人への外科処置が求められ、結果としてオランダのライデン大学の外科手術が興隆した。近代医学はライデン大学から北海を越えてエディンバラ大学に伝えられ、さらにグラスゴウ大学へと伝達された。1815年にはバーンズ兄弟がグラスゴウ大学に外科手術学科を作ったとされる。また1901年にグラスゴウ大学は世界最初の女性医師を輩出した。(38)

つまり1707年の合併までは、南のイングランドに比して常に圧倒的に貧困で不遇であったスコットランドが、プロテスタント主義（清教徒主義）をもとにスコットランド・ルネッサンスをおこし社会改良・発展運動を展開し、イギリス産業革命の情様な発明・発見もグラスゴウ大学を中心に西部スコットランドで行われた。(39)

1707年の「合併」受入により、イングランドの持つ広大な海外市場が開けると、清貧で教育・技術を持つスコットランド人は大英帝国のフロンティアへと向かった。このようなスコットランド・ルネッサンスからヨーロッパ近代理性覚醒運動が発信される歴史ダイナミズムの時代の中から、第7代、第8代エルギン伯爵は登場した。(40)

5. 結びに代えて一産業革命の都・グラスゴウ

18世紀後半からイギリスで生じ社会変革まで起した急速な経済発展は、世界史上、A.J. トインビーが発明した言葉「産業革命」(Industrial Revolution)として認知される。

スコットランドから移住・出稼ぎに海外に渡ったスコットランド人は、世界の7つの海を結び「陽の沈むことのない帝国」を形成した。イギリスが「世界の工場」(Workshop of the World)と称賛された時代、西部スコットランドは「イギリス産業の心臓」(Heart of British Industries)と称賛された。(41)

イギリス産業革命の中でも、スコットランド人は特に水・陸交通、建築、運河・港湾建設、土木・工作機械製造、化学分野に秀ており、多数の発明・企業家を生んだ。母国で実用・科学技術知識を身につけたスコットランド人は先ずイングランドに南下、ロンドンをはじめ諸都市の工業化に活躍、次いでヨーロッパ市民社会形成の遂行者として「エンジニア」の誇りも高く各地の「市

民社会」建設に向かった。スコットランド人技師が主流であったことから、天川潤次郎教授は「イギリスの産業革命はスコットランド人の革命であった」と評価する。(42)

スコットランドとヨーロッパとの「つながり」を見ると、16世紀以来スコットランド人傭兵はロシア宮廷をはじめヨーロッパ各地の諸侯に仕えた記録がある。つまり隣国で歴史的に敵視するイングランドよりも北海を越えての大陸に職を求めた。

18世紀初頭にスコットランド銀行の脆弱性、イングランドの東インド会社成功の夢を追って設立したスコットランドの西インド会社(グリエン会社)であったが、挫折に直面しイングランドとの「経済的合併」を受け入れた。事実、合併の兌換比率も同じポンドでも12分の1で評価される屈辱的な条件であった。合併後、イングランドからの協力を得て亜麻工業や羊毛工業の発展を見たが成功にはいたらず、スコットランド産業革命は1780年代以降の綿工業に始まる。スコットランド出身で成功した英国マンチェスターの紡績企業から中古機械を導入し、イングランド綿工業が厚手の綿織物を主としたのに対して、補完的な市場を模索し、グラスゴウ綿工業は副次的な付加価値の高い複雑な織物模様や高度な染色をした綿織物製造を目指した。また毛織物工業では、イングランド毛織物の補助的な役割を果し、廉価で一般的な毛織物を製造・販売した。(43)

18世紀後半にグラスゴウのキャロン製鉄所が「ヨーロッパ最大の武器庫」と言われの成功をおさめた時、同製鉄所から拉致され強制的に連行された技術者が、ロシアのエカテリーナ2世治下に、ロシアの鉄工業を興した記録がある。A. スミスも幼い時に拉致されなかった話がある。当時では「拉致」が最も手っ取り早い労働力移動であったからである。

スコットランド人のヨーロッパ大陸での人脈は活発化し、19世紀中葉にイタリアでガルバルディが独立運動を起こした時にグラスゴウ土木技師マガダムを中心に支援活動に乗り出し募金・義勇兵派遣に尽力したことも有名である。(44)

しかし鉄工業時代ではスコットランドは自立性を高める。鉄工業には3段階がある。まず鉄鉱石を銑鉄に変換する熔鉱炉工程、次いで銑鉄から錬鉄・鍛鉄に変換する高炉工程、さらに錬鉄を鋼鉄に変換する平炉工程がある。イギリス鉄工業は、最初に西南部ミドランズ地方を中心に伝統的な鉄工業が発達したが、次いで産業革命期に南ウェールズで純度の高い鉱石が見つけれられ高品質の錬鉄・鍛鉄が製造され、同地域鉄工業は特に英国内の鉄道ブームに貢献した。(45)

それに対し純度の低い混ぜ物が多いスコットランドの「黒帯鉱石」(blackband iron stone)の利用方法をT. マッシュットが1780年代に見つけ、1820年代にJ.B. ニールソンが熱衝風熔解法を発明して「燐成分の多い地元鉱石」の実用化に成功し、スコットランドは第3の鉄工業地域となった。(46)

それが一大転機となり1830年代からスコットランド製鉄業は著しい発展を遂げ、価格競争でも1840年代には西部ミドランズや南ウェールズを凌ぎイギリス最大の銑鉄生産地域となり、1844年にはグラスゴウに銑鉄輸出市場が形成された。

事実、イギリスからアメリカに送られた輸出鉄の3分の2はスコットランド銑鉄となった。国内では先進2地域の錬鉄・鍛鉄には対抗できないが価格が安く、輸入したアメリカ側では豊富な

木材資源を用いて高温で攪拌すれば鍛鉄・錬鉄に転換することができた。つまりスコットランドの銑鉄の半製品のなことが逆にアメリカ側の需要と合致して歓迎された。(47)

スコットランド銑鉄は大英帝国の植民地各国で歓迎された。この鉄製品や鉄技術の輸出が、スコットランド技師の海外派遣・移住・出稼ぎを誘引し、さらにスコットランド人の牧師、教師、商人の出移民現象を刺激した。(48)

製鉄業の興隆に刺激を受け、スコットランドでは関連する機械・鉄道・造船業も発展を迎え、1860年代のグラスゴウの繁栄は「機械の都」「鉄道の都」「造船の都」と賞讃された。事実、グラスゴウを中心とする西部スコットランドで第1次世界大戦前に精糖機械の80%、19世紀の末の10年間の世界の蒸気機関車の50%、さらに1870年から1912年間の世界の蒸気鉄船の35%を製造する繁栄を極めた。

これらのビジネスの成功を支えた銀行業もスコットランド人が世界に誇るビジネスであった。両国では「合併」以前の時代、イングランドでは1694年にスコットランド国ジェームス6世が命でイングランド銀行がスコットランド人により設立され、スコットランドでは翌年にスコットランド銀行が創立された。

イングランド銀行は21年期限の延長による勅許状に基づき経営独占されたが、スコットランド銀行は第1次ジャコバイトの反乱に加担したため独占延長が認められず、勅許状が1727年には王立スコットランド銀行、1746年には王立亜麻銀行にも認可され、3銀行による地域協業経が軸となった。世界最初の銀行業者協会 (Association of Bankers) もスコットランドが世界最初であった。(49)

さらに経済発展の著しい19世紀には、スコットランドで多くの銀行が設立されるブームが起こった。その後の変遷を経て1844年にスコットランド銀行法、1845年にイングランド銀行法が可決され、イギリス銀行業が成立されたが、背景で活躍したのはスコットランド人銀行家であった。

事実19世紀の後半に新世界のアメリカ、カナダに進出した銀行業の9割がスコットランド人であり、幕末・明治の日本へ到来したマーカンタイル・バンク (Mercantile Bank of India) 等の諸銀行もスコットランド系銀行がインド・中国を経て到来したものである。

スコットランドの造船業が世界の海での蒸気船活躍の時代を拓いた。それ以前のアジア航路はアフリカ喜望峰経由の大型帆船の時代であった。

しかし帆船では自然条件(風や潮の流れ)に逆らうことはできなかった。蒸気船の発明が小型ながら自然条件にも逆らって航行できることを可能にした。蒸気船はインドの内陸部、中国の内陸部の河川をも遡り、定期的運航が可能となった。フランス人レセップスが英国資本の援助を受け1869年にはスエズ運河を開通させ、地中海から紅海、さらにインド洋を結ぶ蒸気船航行ルートを実現した。(50)

19世紀の蒸気船関連の技術改良の鉄製船体建造、プロペラ推力、内燃機関等の発明がグラスゴウ大学で行われ、クライド河流域の造船所で建造され、新型蒸気船が続々と世界へ輸出され、それがアジア・極東にも到来することになる。

本稿の研究遂行には、平成22年度科学研究費基盤研究一般Cの活用による。

注

- (1) スコットランドを代表する貴族の名門 Grey 伯爵家と Elgin 家の姻戚関係は1846年のエルギン家のメアリー・ルイザ・ランバートンとの結婚に始まる。S.G. Checkland, *The Elgins 1766-1917, A Tale of Aristocrats, Proconsuls and Their wives*, 1988, Aberdeen University Press, pp.116-117.
- (2) J. Kellas, *The Scottish Political System*, Cambridge University Press, 1973. pp.1-19, 拙著『近代スコットランド社会経済史研究』(同文館 1985年) 1-27頁
- (3) A. Lang, Chapter 8 (The Wars of Bruce) in *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol. 1, A.M.S. Press, New York pp.200-240.
- (4) M. Duunan ed., *Larousse Encyclopedia of Ancient & Medieval History*, Pal Hamlyn, 1968. pp.277, 281.
- (5) J.H.S. Burleigh, *A Church History of Scotland*, Oxford University Press, 1960, Appending, 2.
- (6) S.L. Hunter, *The Scottish Educational System*, Pegamon Press, 1968, pp.2-5.
- (7) スコットランド教育史は拙著前掲補論「スコットランドの独自性」第1章「実業教育の伝統」277-283頁
- (8) I.R. Findlay, *Education in Scotland*, David & Charles, Newtson Abbot, 1973 p.10
- (9) G. Donaldson, *Scottish Historical Documents*, pp.92-93.
- (10) *1496 Education Act (Act of the Parliament of Scotland, 2.238, C)*
- (11) スコットランドの実学主義はスコットランド教会に牧師の活動に帰因する。松谷好明訳「スコットランドにおける教会と国家」(T.ブラウン著 すく書房 1985年) 参照
- (12) M. Lynch, *Oxford Companion to Scottish History*, Oxford University Press, 2001, pp.524, 525.
- (13) G.G. Coulton, *Scottish Abbeys and Social Life*, Cambridge University Press, 2010, pp.155, 205, 257
- (14) P.&S. Sommerset Fry, *The History of Scotland*, Routledge & Kegan Paul, 1982, pp.77, 132
- (15) T.B. Smith, *Scotland (The British Commonwealth Vol. 2)*, Stevens & Sons, 1962, pp.11-15
- (16) Sir J. Ferguson, *The Sixteen Peers of Scotland*, Oxford, 1960. pp.23-26.
- (17) エルギン大理石については、ここでは S. Nagel, *Mistress of the Elgin Marbles, A Biography of Mary Nisbet, Countess of Elgin*, William Morrow, 2004 参照
- (18) Curzon of Kedleston, *Marquees, British Government in India*, 1925. Vol 1 pp.13-16, Vol 2, pp.78-82.
- (19) S.G. Checkland, *op cit.*, xi-xvi
- (20) 横浜開港150周年記念として「日英友好150年の礎を築く第8代エルギン伯爵と絵画工芸品展」が平成21年10月10日から11月8日、神奈川県立歴史博物館で開催された。チャールズ・ブルース伯爵(父の11代エルギン伯爵後継予定者)と姉君が見えた。同博物館から英国大使館、British Council, Scottish Development Agencyの協賛を得て記念冊子が発行された。
- (21) S.G. Checkland, *op. cit.*, pp.61-63.
- (22) フランスとイングランドが100年戦争も時代、イングランド宮廷はヨーロッパ大陸からスコットランドを経由してワインを輸入した。スコットランドのメアリー女王に象徴されるようにスコットランド王室や学識者には長年敵対してきたイングランドに比してフランスは親近感ある国であった。この交流がグランド・ツアーの伝統をうみ、また18世紀後のスコットランド常識哲学学派とフランス百科全書学派の交流を生んだ。Sir J.B. Paul ed, *The Scots Peerages*, Edinburgh, 1906. p.10
- (23) 拙著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』(藤原書店 2003年) 105-110頁
- (24) M.E. Bruce, *Family Records of the Bruces and Cumyns*, Edinburgh, 1870, p.24
- (25) J. Buchan, *Capital of the Mind, How Edinburgh Changed the World*, John Murray, 2003; S. Lamont, *When Scotland Ruled the World, The Story of the Golden Age of Genius, Creativity and Exploration*, Harper Collins, 2001 が参考になる
- (26) Sir J.B. Paul ed, *The Scots Peerages*, Edinburgh, 1906. p.10
- (27) N. Canny ed., *The Origins of Empire (The Oxford History of the British Empire 2001)* pp.406, 470

- (28) 8代エルギン伯については、J.L. Morrison, *The Eighth Earl of Elgin, A Chapter in Nineteenth-Century Imperial History*, Hoddeer & Stoougatten Ltd, London, 1927 を参考とした。
- (29) S.G. Checkland, *op. cit.*, p.95
- (30) T. Vretts, *Lord Elgin Lady*, 2001, p.363
- (31) D. Defoe, *The Review*, Vol. 3 No. 46, April 1706; Vol. 8, No. 145, March 1712. 当時のスコットランド人科学者の優秀性については S.G. Clement & R.H.S. Robertson, *Scotland's Scientific Heritage*, Oliver & Boyd, Edinburgh 1961. p.162
- (32) E. Gibbon, *Autobiography*, Everyman Book, London, 1927. p.50; G.M. Trevwlyan ed., *The English Social History*, London, 1946. p.276.
- (33) 天川潤次郎「イギリス近代化と非国教徒専門学校の意義」(『西洋史学』第64号) 64, 65頁
- (34) 星野彰男「アダム・スミスの思想像」(新評論 1976年) 56-57頁
- (35) G. Bryson, *Man and Society, The Scottish Inquiry of the Eighteenth Century*, A. Kelly, New York, 1968, pp.122-23, 130; M. Joyce, *Edinburgh, the Golden Age, 1769-1832*, Longmans Green, London, 1975. p.124.
- (36) W.R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, Kelly, New York, rep in 1965, pp49-50.
- (37) アンダーソン・カレッジの果たした役割については拙著『国際日本を拓いた人タースコットランドと日本の絆一』(同文館 1984年), 同『スコットランドと近代日本—グラスゴウ大学の「東洋のイギリス」創出への貢献』(丸善プラネット社 2001年)
- (38) F. Munro, M. Moss & R.H. Trainor, *University, City and State, The University of Glasgow since 1870*, Edinburgh University Press, 2000. p.77
- (39) 当時のスコットランドの文明化については、田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究—文明社会と国制一』(名古屋大学出版会 1999年), 長尾伸一『ニュートン主義とスコットランド啓蒙』(名古屋大学出版会 2001年) が参考になる。
- (40) 拙稿「幕末・開国とエルギン伯爵」(『望星』東海教育研究所 2010年6月号所収) 1106-111頁
- (41) M. Moss & J.R. Hume, *Workshop of the British Empire, Engineering and Shipbuilding in the West of Scotland*, Heinemann, London, 1977. pp.1-5.
- (42) 拙論「19世紀の経済発展—産業革命の展開—」(『近代スコットランド社会経済史研究』第3部所収) 145-226頁
- (43) R. Maxwell, *His Select Transactions of the Honourable Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture in Scotland*, John Donald Publisher, Edinburgh, 1743. p.317
- (44) 19世紀中葉のグラスゴウ市民は英国自由貿易主義を掲げ、資本と技術を中心にヨーロッパ各地の近代化・市民化に貢献した。中世以来のスコットランド人のヨーロッパ各地のつながりが基盤となって連携・連帯が強化された。イタリアとスコットランドの関係史は J. Pieri, *The Scots-Italians, Recollections of an Immigrant*, Mercatpress, 2005 がある。
- (45) 拙稿「産業革命期スコットランドの株式企業—Carron Company の事例」(『社会経済史学』第35巻3号 1969年) 34-35頁。
- (46) H. Hamilton, *The Industrial Revolution in Scotland*, F. Cass & Co. 1966. pp.150-172.
- (47) R.H. Campbell, 'Development in the Scottish Pig Iron Trade 1844-1848', in *The Journal of Economic History*, No. 3, Vol. 15. p.223.; A. Birch; *The Economic History of the British Iron and Steel Trade, 1784-1879*, F. Cass & Co. London, 1967. p.238
- (48) G. Donaldson, *The Scots Overseas*, Robert Hall, London, pp.23-46
- (49) S.G. Checkland, *Scottish Banking A History; 1695-1973*, Collins, 1975.
- (50) C.E. Fayle, *A Short History of the World's Shipping Industry*, George Allen & Co, 1934. pp.242-250.